

國學院大學學術情報リポジトリ

公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001842

公開学術研究集会

「國學院大學の国学研究の現在」

研究開発推進機構日本文化研究所研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(研究代表者 遠藤潤)は、科学研究費補助金基盤研究(B)「近世における前期国学の総合的研究」(研究代表者 根岸茂夫〈文学部教授〉)の共催を得て、2014年2月8日に公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」を開催した。

この研究集会は、研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」の構成員であるとともに、科研費「近世における前期国学の総合的研究」の研究協力者でもある松本久史(神道文化学部准教授)の立案によるもので、その開催趣旨は次の通りである。

開催趣旨

「国学」の名を冠する國學院大學においては、建学以来、学問の基盤として国学の伝統が継承されてきた。附置研究所であった日本文化研究所では、昭和30年の開設以来、国学に関する研究事業が継続して行われてきた。また、平成14年度に採択された文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」事業では、学際的・総合的な日本文化研究として、國學院大學の現代的な国学のあり方が示された。

現在、國學院大學では、国学四大人の鼻祖、荷田春満を研究対象とした、科学研究費補助金研究事業「近世における前期国学の総合的研究」(代表 根岸茂夫 文学部教授)および平田篤胤研究を中心としつつ、幅広く研究連携を模索している研究開発推進機構日

本文化研究所「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」(代表 遠藤潤 神道文化学部准教授)の二つの研究事業が遂行されており、ともに平成25年度で事業の区切りとなる。本研究集会においては、両事業の概要を説明し、さらに双方の具体的な研究成果を示すことにより、國學院大學における国学研究の現状を周知し、今後の展望をも示すものとした。

日時は、平成26年2月8日(土)午後1時から午後6時30分までを予定していたが、当日東京地方は激しい大雪に見まわれたため、急遽予定を変更して、発題時間などを圧縮するなどして午後4時30分終了とした。以下、当日変更後の進行時間と発題者・発題題目を示す。

- 1:00-1:10 開会、趣旨説明(松本久史)
- 1:10-1:25 発題① 根岸茂夫「『近世における前期国学の総合的研究』事業の概要」
- 1:25-1:40 発題② 白石 愛(東京大学総合研究博物館特任助教)「江戸における荷田家のネットワーク—荷田信名『在府日記』を中心に—」
- 1:40-1:55 発題③ 松本久史「荷田派の祝詞研究—稲荷祠官 大西親盛を例にして—」
- 1:55-2:10 発題④ 一戸 渉(慶応義塾大学斯道文庫准教授)「和歌史上における荷田春満の位置」
- 2:10-2:20 休憩

2:20-2:35 発題⑤ 遠藤 潤「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォームの構築』の概要」

2:35-2:50 発題⑥ 小林威朗（研究開発推進機構 PD 研究員）「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成」

2:50-3:05 発題⑦ 三ツ松誠（研究開発推進機構 PD 研究員）「史料から見た『靈能真柱』への同時代的反応」

3:05-3:20 発題⑧ 小田真裕（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）「嘉永安政期における気吹舎の関心—高玉安兄宛平田鋲胤書簡をてがかりに—」

3:20-3:30 休憩

3:30-4:30 コメント 古相正美（中村学園大学教育学部教授）、質疑応答、閉会

なお、林淳（愛知学院大学教授、國學院大學研究開発推進機構客員教授）も参加した。

八つの発題のうちおおそ発題①から発題④までが根岸科研にもとづく報告、発題⑤から発題⑧までが「國學院大學 国学研究プラットフォーム」研究事業にもとづく報告となっている。

発題①「『近世における前期国学の総合的研究』事業の概要」において根岸茂夫は、同事業の概要について、研究当初の背景、研究の目的、研究の方法、研究の具体的な課題、研究の成果などについて報告した。具体的な課題としては、春満の学問が時間的・空間的に広がっていく過程の解明、春満の生家である東羽倉家および稲荷社を中心とした社会関係の解明を提示し、それぞれについての成果の概略を述べた。

白石愛は、発題②「江戸における荷田家のネットワーク—荷田信名『在府日記』を中心に—」において、春満の実弟である信名による5年間の日記である『在府日記』をとりあげ、同資料に見られる人名をもとにして、江

戸における荷田家の多様なネットワークについて論じた。同資料には多方面にわたる人物が1100人以上登場し、それらの人々との間で、さまざまな活動が行われていたことの一端を紹介した。

松本久史は、発題③「荷田派の祝詞研究—稲荷祠官 大西親盛を例にして—」において、いわゆる「カノン」形成史という文脈のもと、祝詞の古典とは何かという問題意識の形成に荷田派の活動がどう関わったのかという点について、春満、在満、賀茂真淵、大西親盛の大祓詞注釈の比較によって論じた。なかでも中心的な位置を占めたのは、根岸科研に関わる國學院大學による東丸神社史料調査によって発見された大西親盛の大祓詞注釈書の内容の考察であった。

一戸渉は、発題④「和歌史上における荷田春満の位置」において、春満の和歌の特徴について、上記の東丸神社史料調査で発見された史料などにもとづきながら論じた。従来、春満が恋歌を詠まないという理解が一般化していたきらいがあるが、実際史料に即して春満の歌を検討すると恋歌が存在しているということを指摘した。また、歌会のあり方について、史料にもとづきその具体相を明らかにした。

遠藤は、発題⑤「研究事業『國學院大學 国学研究プラットフォームの構築』の概要」において、同研究事業の概略について、國學院大學におけるこれまでの国学研究とその成果、「國學院大學 国学研究プラットフォーム」事業の趣旨、また国学研究の拠点あるいはハブとして優先的に必要なこと、などについて説明した。

小林威朗は、発題⑥「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成」において、秋田県文書館蔵の草稿本『古史伝』について、その書誌情報（表紙、段構成、加筆修正等）と平田家の書簡や日記との照合により、草稿本『古史伝』の成立時期をある程度の幅で推測でき

ることを示し、これをふまえて内容分析を行うことにより、版本のみからはうかがうことのできない、『古史伝』における篤胤の思想形成過程について具体的に考察した。

三ツ松誠は、発題⑦「史料から見た『霊能真柱』への同時代的反応」において、篤胤のが神道講釈を実施していたことをふまえて、未完であった『霊能真柱』講本を評価しなおし、講本と版本のあいだを考えることで、江戸の庶民と篤胤の学問の間の距離を考える一助になる可能性を指摘した。

小田真裕は、発題⑧「嘉永安政期における気吹舎の関心—高玉安兄宛平田鋳胤書簡をてがかりに一」において、日本文化研究所を拠点として読解が続けられている、相馬地方の高玉家宛平田鋳胤書簡という資料群について、諸国への平田国学の展開と、モノと情報の両面をもつ書物のあり方という二点を観点として、嘉永元年～嘉永五年、嘉永六年～安政年間の二期に区分しながら分析した。前者の時期の特色として、気吹舎訪問や書物注文による学風の広まりへの言及が散見すること、また後者には「珍書」の送付をめぐるやりとりが目立つことや高玉家の水戸学への関心などが見られることを指摘した。

古相正美はコメントとして、根岸科研にもとづく成果については、東丸神社の調査によって新史料の発見や新知見があったこと、また白石や一戸の発表に見られるように、和学の世界のネットワークが明らかになったことなどを指摘し、この共同研究によって、歴史、神道、文学、思想などいろいろな分野か

ら同じ対象へとアプローチする形が成立したこと、またモノを見る視点が生かされたことなどを述べた。

他方、平田篤胤研究については、秋田県立図書館・秋田県公文書館や国立歴史民俗博物館など史料の所在の問題にふれた上で、現在の研究状況に立てば、本居宣長と篤胤のあいだで、門人教授や広告、書簡のやりとりなどの比較が可能なのではないかと指摘し、写本と版本の違い、特に写本や書簡は門人を中心に流通することへの注目の必要性を述べた。

松本は、荷田春満と平田篤胤の研究状況の共通性として、ともに基本的かつ大規模な資料群が悉皆調査によって明らかになった点を指摘した。林は、両者の共同研究にはテキストの精読と社会集団への考察がうまくリンクしている状況が見られると述べ、その上で、ネットワークを形成して学問を行うようになった、その時代性の評価というものも必要だと指摘した。さらに参加者からもさかんな質問や意見が出され、大雪での帰宅の心配を忘れるような熱意あるやりとりが行われた。

「近世国学の入口と出口を」という松本の発案から始まった、荷田春満と平田篤胤を焦点とした今回の研究集会であったが、近世国学研究の今までとこれからを展望する会合になった。モノとしての書物、人のネットワークを具体的に追うことができる史料群の公開。その実現がなった現在、その先に今後の近世国学研究の太い方向があることを実感した一日であった。

(遠藤潤)